

## 16、Duchenne 型 PMD 患者の要求水準 検査法にみられる行動特性の経年変化

国立療養所鈴鹿病院

野尻久雄 河野慶三  
片山幾代 宮崎光弘

PMD児の人格特性を、要求水準検査法により検討してきた。その結果は、つぎのとおりである。

1. PMD児は、先行する体験を手がかりとして、次の行動目標を的確に決定することができない例が多く、設定された目標も十分に達成されていない。
2. この傾向は低年齢層に顕著であり、加齢とともに正常化してくる。

このような年齢にともなう顕著な変化がみられたので、同一の PMD児を対象として、その経年変化を調査した。

### 〔対象と方法〕

前回の対象者42例中再検査のできた17例（13～19才）が今回の対象であり、初回検査と同一の方法で実施した。初回検査より3年が経過している。（昭和51年度研究成果報告書 P・P・91～95 参照）

### 〔結 果〕

#### 1) 作業量

作業量は図1のとうりで、17例中15例（88.2%）に増加がみられた。その平均値は  $65.5 \pm 11.4$  で初回検査の平均値  $53.1 \pm 16.9$  と比較しても、有意に増加していた（ $P < 0.05$ ）。

#### 2) 目標差・目標変動率

目標差、目標変動率の計算結果は図2に示した。

目標差が（-）の値を示している者が、今回の検査では4例であった。初回検査に（+）であった例は、いずれも（+）に変化していた。

目標変動率は、平均値が  $4.3 \pm 2.0$  であり、初回検査の平均値  $6.5 \pm 4.6$  よりも有意に減少していた（ $P < 0.05$ ）。

これらのことは彼らが、初回検査に比べて、目標を先行する作業量よりも多く設定し、その設定の確かさも増していることを表わしているものと考えられた。

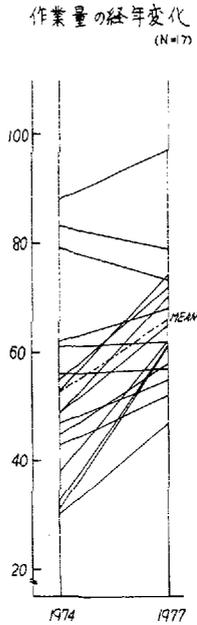
#### 3) 達成差・達成変動率

達成差では初回検査との間に顕著な変化は認められなかった。

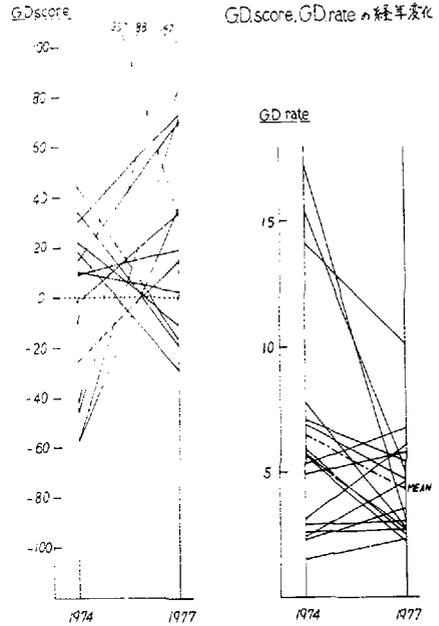
達成変動率の平均値は、 $5.3 \pm 1.6$  であり、初回検査の平均値  $7.1 \pm 3.4$  よりも5%の危険率で有意に減少していた（図3）。

これは、設定された目標が加齢により、より確かに達成されるようになってきたことを示している。

(図1)



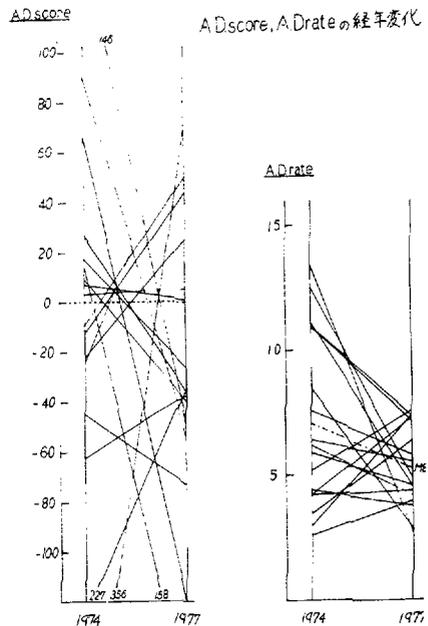
(図2)



【ま と め】

今回の結果は、既に報告したPMD患者の年齢群間の差と同一のものであり、PMD患者は、加齢とともに健常者群の検査結果に近づくというわれわれの以前の報告の結論を支持しているものといえよう。

(図3)



↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

PMD 児の人格特性を、要求水準検査法により検討してきた。その結果は、つぎのとおりである。

1. PMD 児は、先行する体験を手がかりとして、次の行動目標を的確に決定することができない例が多く、設定された目標も十分に達成されていない。

2. この傾向は低年令層に顕著であり、加令とともに正常化してくる。

このような年令にともなう顕著な変化がみられたので、同一の PMD 児を対象として、その経年変化を調査した。